名古屋SF読書会 λ｜プロジェクト・ヘイル・メアリー

アンディ・ウイアー　2024・10・6

名古屋ＳＦ読書会ＵＲＬ　https://sciencefiction.ddns.net/sf2/（７月より変更）

【ネタバレあらすじ】

見知らぬ部屋で目覚めた「ぼく」は記憶を失っている。同室の２名は既に死んでいた。宇宙船の中にいることを実験によって確認する。徐々に記憶が蘇る。

「ぼく」の名前はライランド・グレース、サンフランシスコ在住の中学教師で、科学を教えていた。博士号を分子生物学で取得し、生物進化は水を必要としないとの論文を著した。その論文の内容により、ペトロヴァ対策委員会という国際機関からグレースは呼び出され、協力を依頼される。太陽の出力が落ちて暗くなっており、その原因はロシアのペトロヴァ博士が太陽系内で発見した太陽から金星へと伸びるライン（ペトロヴァ・ライン）にあるらしい。小さな黒い点が赤外線を放射しながら移動しているのだ。このままでは太陽が暗くなり、三十年以内に地球は寒冷化し、生物は死に絶えてしまう。太陽付近の灼熱下でも生存している黒い点は水以外で生きる生物だとペトロヴァ対策委員会が考えたことがグレースを呼び出した理由だった。黒い点を渡されたグレースは研究の結果、直径１０ミクロン質量２０ピコグラムの黒い点は太陽エネルギーを食べて繁殖していると判断し、黒い点を「アストロファージ」と名づける。

アストロファージの内部に水があることがわかり、グレースはいったん解雇されるが、交渉の末、三個のアストロファージを手に入れ、研究を続ける。アストロファージは、体内でタンパク質をつくるために二酸化炭素（炭素と酸素）に反応して宇宙を移動し、移動先で繁殖（分裂）して恒星へ戻るというサイクルを繰り返していることをグレースは突き止める。この発見により、アストロファージの人工繁殖が可能となり、人類は強力な宇宙船推進剤を手にした。

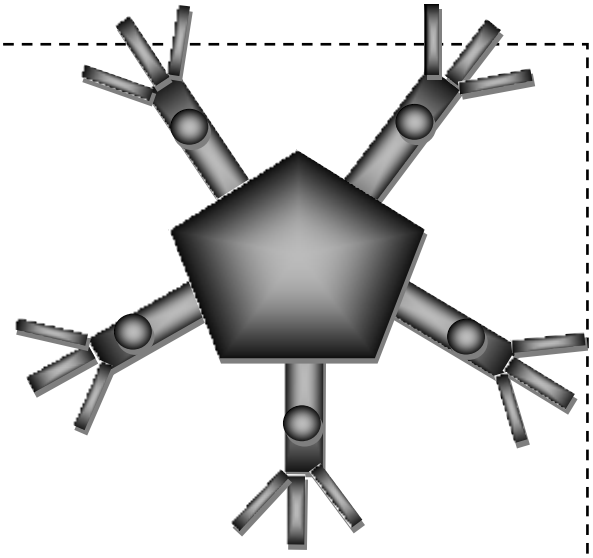
アストロファージに感染して光度が１０％落ちた恒星群の中で、タウ・セチだけはなぜか感染していない。その秘密を探るために、委員会は片道旅行の恒星間宇宙船〈ヘイル・メアリー〉号を建造して、１２光年先のタウ・セチへ向かう計画を立てる。手に入れたデータは、ビートルズと名づけられた四つの帰還船（もちろん名前はジョン、ポール、ジョージ、リンゴ）を打ち出すことで地球に届ける。３名の乗員は４年のほとんどを人工冬眠で過ごす。グレースはたまたま昏睡耐性遺伝子を持っており、乗員に選ばれたようだ。他の乗員、中国人ヤオとロシア人イリュヒナは、何らかの事故で亡くなったと思われる。タウ・セチに辿り着いたグレースは驚くべきことに、そこで別の宇宙船を発見する！

〈ブリップA〉と名づけた宇宙船からシリンダーが届く。中にはペトロヴァ・ラインを示す模型が入っており、異星人の故郷がエリダヌス座４０番星であることがわかる。グレースは模型に太陽へのラインを追加して送り返す。〈ブリップA〉はさらに近づき、トンネルを伸ばして〈ヘイル・メアリー〉と接触。壁越しに見えた相手は、大きなクモのような異星人であった。

グレースは異星人（エリディアン）の乗員をロッキーと名づけ、主にロッキー主導でコンタクトが進んでいく。音楽でコミュニケートする異星人と、片言ながら会話ができるようになる。ロッキーの船にも他に乗員がいたが、病気で亡くなり、ロッキーだけが生き残った（エリディアンには放射線耐性がなく、ロッキーはたまたま周囲にアストロファージがいたため放射線を浴びずにすんだのだ）。タウ・セチに来た目的はグレースと同じく、アストロファージに感染していない理由を探るためだった。

ロッキーはキセノナイトで作られた球の中に入り〈ヘイル・メアリー〉号内に居住する。タウ・セチ第三惑星（エイドリアンと命名）を探査し、アストロファージの捕食者がここにおり、この惑星がアストロファージの母星であることがわかる。エイドリアンでサンプルを採取中にトラブルが発生し、グレースを救うため、ロッキーが球から出てきてしまう。

ロッキーは昏睡状態となるが、何とか復活。苦労の末、アストロファージ捕食者を入手することができ、タウメーバと名づける。しかし、逃げ出したタウメーバがアストロファージを食べてしまい、〈ヘイル・メアリー〉の燃料が尽きる。ビートルズ内のアストロファージを使って、危機を脱する。タウメーバはそのままでは窒素内で死んでしまうので、進化させた改良型を作成。これを厳重に保管し、グレースとロッキーは別れを告げてそれぞれの船に乗る（ロッキーのおかげで帰りの燃料も手に入った）。ビートルズもすべて送り出す。しかし、改良型はキセノナイトを通り抜けてしまうことにグレースは気づく。これではロッキーの船の燃料はすべてなくなってしまう。このまま地球に戻るか、餓死を承知でロッキーを助けるか、グレースは究極の選択を迫られる。悩んだ末、彼は後者を選んだ。最終的に食糧問題は解決され、グレースはロッキーの母星で暮らすことになる。そして、どちらの母星も助かった――。



エリディアンの特徴

・母星はエリダヌス座４０番星。
・29 気圧、210℃の環境で暮らし、アンモニアを呼吸する
・人間よりも小さく重い（ロッキーは体重１６８kg）
・五角形の甲羅から五本の脚が放射状に伸びている
・脚の先に手があり、三角形っぽい指が三本ある
・甲羅の部分には服を着ている
・数字の基本は６
　０～５が（ℓ、Ⅰ、Ⅴ、λ、＋、∀）
　例…「λⅠ」は１９を示す
・視覚は発達せず、音楽でコミュニケートする
・平均寿命は６８９年（ロッキーは２９１歳）

ファースト・コンタクトと言えば……

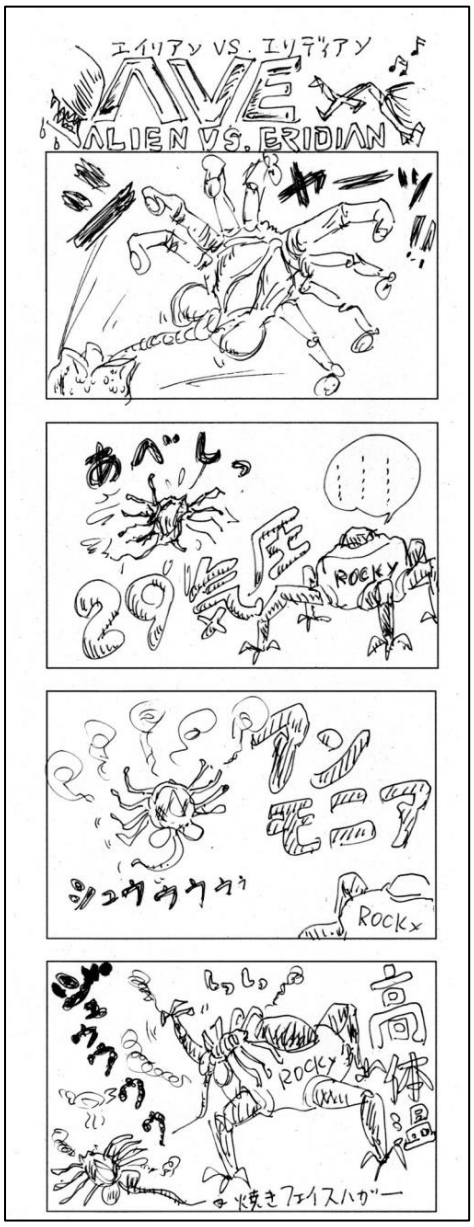
・ファースト・コンタクトものの原点と言えばマレイ・ラインスター「最初の接触」（1945）。宇宙でエイリアンの船と遭遇し意思疎通ができたら、やるべきことは既にここに書かれている。ハル・クレメント『重力の使命』（1954）も高重力の惑星メスクリンに住む昆虫型エイリアンとの接触を描いた古典的傑作。中性子星に住むチーラ人との接触を描いたＲ・Ｌ・フォワード『竜の卵』（1980）も忘れ難き傑作である。
・ＳＦでは人間型、昆虫型、猫型、植物型などさまざまなエイリアンとの接触が描かれてきたが、変わったところでは、知性を備えた暗黒星雲とのコンタクトを描いたフレッド・ホイル『暗黒星雲』（1957）、知性を持つと推測される巨大な海とのコンタクト／非コンタクトを描いたＳ・レム『ソラリス』（1962）がある。
・アンソロジーとして、様々な宇宙生命とのコンタクトを描く作品６編を収めた宇宙生命ＳＦ傑作選『黒い破壊者』（2014）、人類が宇宙に進出していく過程で出会う異星生命の様々な形を描く作品９編を収めた宇宙探査ＳＦ傑作選『星、はるか遠く』（2023）の２冊（ともに中村融・編）があるので、併せてお勧めしておきたい。
・ことごとく地球人の逆を突き理解不能な行動をとるエイリアンを描いた筒井康隆「最悪の接触（ワースト・コンタクト）」（1978）、味覚でコミュニケーションを行うエイリアンとの接触を描く梶尾真治「地球はプレインヨーグルト」（1978）など、日本にも昔からファースト・コンタクトものの傑作は多い。最近では、ハル・クレメントからペンネームをつけたという春暮康一が『法治の獣』（2022）『一億年のテレスコープ』（2024）などでエイリアンとのコンタクトを真正面から描き、高い評価を得ている。

蜘蛛型エイリアンと言えば……

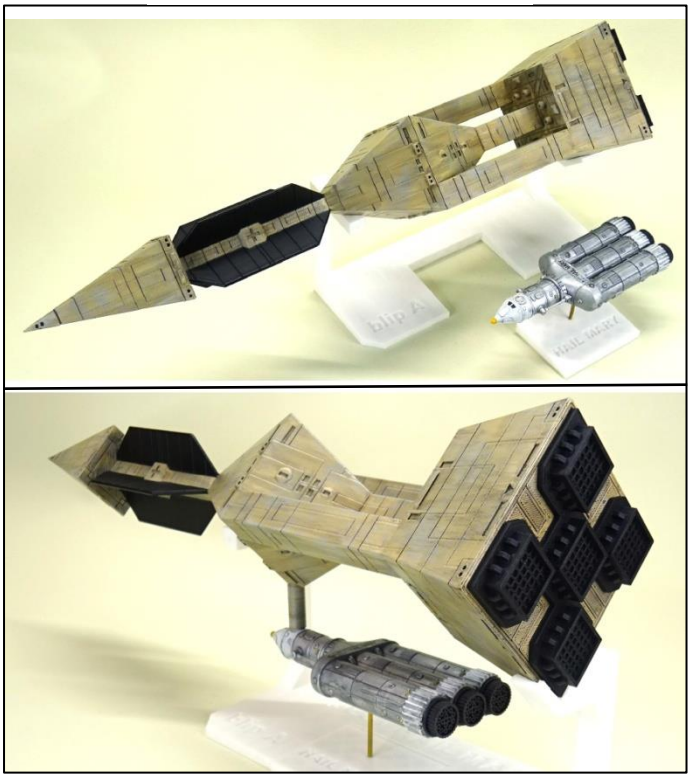
・『宇宙の戦士』（1959）Ｒ・Ａ・ハインライン
　人類と戦うエイリアンが「蜘蛛みたいな姿」と形容されている。女王のもとに兵隊バグ、労働バグ、頭脳バグなどがいて役割が分かれているので、行動的には蜂に近い。
・『スパイダー・ワールド』三部作（1987-1992）コリン・ウィルソン
　エイリアンではないが、25 世紀の地球で、進化した巨大な蜘蛛が人間を支配している。
・『時の子供たち』（2015）エイドリアン・チャイコフスキー
　ある惑星で、人類が類人猿を進化させようとして間違って蜘蛛を進化させてしまう。知性を獲得した蜘蛛と人類とのファースト・コンタクトが読みどころ。
・「宇宙への進出の過程で、人類は穏健な異星人と出会うこともあったが、彼らは通例、怪物的な種族に迫害される立場にあり、人類の介入を必要としていた。また味方の異星人が、哺乳類や鳥類の特徴をさまざまに取り揃えた風貌であるのに対し、敵にまわる異星人は、爬虫類、節足動物、軟体動物（特にタコ）などに例外なく似る傾向があった」（ブライアン・ステイブルフォード『SF エンサイクロペディア』異星人の項）。『プロジェクト・ヘイル・メアリー』や『時の子供たち』はこうしたステレオタイプを見事にひっくり返してみせたと言える。

アンディ・ウィアー　作品リスト

１●『火星の人』（2014）小野田和子訳／ハヤカワ文庫SF／2014年8月刊→新版が2015年12月刊
　※星雲賞受賞　※『SFが読みたい！』海外篇１位　※『オデッセイ』（2015）として映画化
２●『アルテミス』（2017）小野田和子訳／ハヤカワ文庫SF／２０１８年1月刊
　※『SFが読みたい！』海外篇8位
３●『プロジェクト・ヘイル・メアリー』（2021）小野田和子訳／早川書房／2021年12月刊
　※星雲賞受賞　※『SFが読みたい！』海外篇１位　※映画化進行中／2026年公開予定



（▲半可通さん作）



▲フリスクＰさん作のヘイル・メアリーとブリップＡ
※会場に展示してあります！

名古屋 SF 読書会

　初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

https://sciencefiction.ddns.net/sf2/

【今までの課題本】

2014・11・22／ル・グイン『闇の左手』
2015・2・15／ベスター『虎よ、虎よ！』
2015・７・26／ブラッドベリ『華氏４５１度』
2016・1・23／イーガン『ゼンデギ』
2016・4・29／ハインライン『宇宙の戦士』
2016・7・30／ベイリー『カエアンの聖衣』
2016・11・23／レム『ソラリス』
2017・4・30／ノース『ハリー・オーガスト、15 回目の人生』
2017・8・5／ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』
2017・12・2／伊藤計劃『ハーモニー』
2018・４・29／オールディス『地球の長い午後』
2018・7・21／小松左京『日本沈没』
2018・１２・22／ウィンダム『トリフィド時代』
2019・４・２７／山田正紀『宝石泥棒』
2019・８・３／クラーク『2001 年宇宙の旅』
2019・12・22／劉慈欣『三体』
2021・10・３／劉慈欣『三体Ⅲ』（オンライン）
2024・6・30／飛浩隆『グラン・ヴァカンス』

スタッフ＆ゲスト紹介

　名古屋ＳＦ読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後もよろしくお願いいたします。（文責・渡辺英）

長澤唯史　@Sonopapa
　椙山女学園大学教授。著作に『70 年代ロックとアメリカの風景』（小鳥遊書房／2021 年）。今回は残念ながら欠席です。

舞狂小鬼（洞谷）
　ＳＦ、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺英樹　@gonza63
　７月末にハヤカワ文庫ＳＦから出たキャサリン・M・ヴァレンテ『デシベル・ジョーンズの銀河オペラ』の解説を書きました。面白いので、ぜひ読んでください！

渡辺睦夫
　海外ＳＦファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

片桐翔造　@gern
　元 SF マガジン DVD レビュー担当。最近ご結婚されました。おめでとうございます！

渡辺啓一　@eleking
　大学時代にＳＦ研に在籍して基本を学び、あとはのんびりＳＦと付き合っています、とのこと。

中村融／なかむらとおる（翻訳家）
　中央大学在学中より海外ＳＦの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987 年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、ＳＦ／ファンタジーのアンソロジー編纂など、多方面で活躍中。